

「信州エクスターンシップ2017」開催報告

～2年目を終えた人材還流戦略の進化～

研究員補 川尻 知弥

目次

1. 2年目を迎えた「信州エクスターンシップ」
2. 信州エクスターンシップ2016から進化した点
3. プログラムの振り返り
4. 信州エクスターンシップ2017の効果と地域滞在型インターンシップの展望を探る

1. 2年目を迎えた「信州エクスターンシップ」

2017年8月27日から9月2日の1週間に亘り、長野県長野市を舞台とする農・産・官・学連携による地域滞在型インターンシップ「信州エクスターンシップ」が開催された。信州エクスターンシップは長野県産業労働部を主催者とし、都会で暮らす若者の長野へのUIターン就職へと繋げることを目的として2016年夏に初めて開催され、2017年に2度目の開催を迎えた。当研究所は、2016年夏の第1回信州エクスターンシップ(以下、「信州エクスターンシップ2016」と表記)に引き続き参画した(信州エクスターンシップ2016の開催報告については、川尻(2016)を参照)。

2017年の信州エクスターンシップ(以下、「信州エクスターンシップ2017」と表記)では、前年と同じく主に都内の大学に通う大学1～3年生を参加応募可能とした。信州エクスターンシップ事業の発案者であり、参加学生の募集窓口を務めた信州エクスターンシップ2017事務局長の吉澤潔氏は、「『長期の就職活動のパーツとしてのインターンシップ』との違いを明確にしたいから」として、名称を

(表1) 参加学生の学年別人数

学 年	女 性	男 性	総 計
1 年	0	2	2
2 年	21	5	26
3 年	4	4	8
総 計	25	11	36

(表2) 参加学生の出身地別人数

出身地	女 性	男 性	総 計
首都圏	15	7	22
長野県	4	2	6
その他国内	3	2	5
海 外	3	0	3
総 計	25	11	36

インターンシップではなくエクスターンシップとしている(吉澤・阪井・川井, 2016)。実際に信州エクスターンシップ2017参加学生の学年構成(表1)を見てみると、36名中28名と8割近くが就職活動を始めていない1・2年生である。8名の3年生も、参加した時点

では本格的な就職活動の段階には至っていなかった。

また、参加学生の出身地別人数内訳は表2の通りである。首都圏出身の学生は22名、地元・長野県出身の学生は6名、その他国内の府県出身者が5名、ベトナム出身で都内の大学に通う学生3名も参加した。

信州エクスターンシップ2017でも、前年と同様、JA長野中央会からは食事・宿泊・研修場所としてJA長野県総合研修所の提供を受けた。参加学生は1週間の期間中、JA長野県総合研修所で集団生活を送りつつ、JA長野中央会を含む長野市近郊の企業・団体を訪問し、そこでのインタビューに臨んだ。

こちらも前年と同じく、学生の東京―長野間の往復送迎については株式会社農協観光長野支店による業務協力を受けた。

2. 信州エクスターンシップ2016から進化した点

2度目の開催を迎えた信州エクスターンシップは、参加企業・団体の期待に応えるべく前年よりもバージョンアップした。大きな変化として挙げられる点は3つある。

1つ目は8月27日から9月2日に開催された信州エクスターンシップ2017本番プログラムの前後に「事前教育」プログラム（6月・7月）、「事後教育」プログラム（9月）が導入されたことである。信州エクスターンシップ2016は初めての開催ということもあり、参加学生のハードルを高くしないために参加申込書の提出と参加費の振込のみを応募要件とし、応募した学生は全員参加可能とした。しかし、後述のようにより多くの大学の参加を得られた信州エクスターンシップ2017では、

地域社会・地域経済の現状に対してより問題意識や好奇心を抱いている学生の選抜を目的として、事前教育プログラムの履修と課題レポートの提出も応募要件として課した。そのような過程を経て選抜され、1週間に亘る信州エクスターンシップ2017の本番プログラムに参加した学生は、9月中旬の事後教育プログラムにも出席した。事後教育プログラムでは、1週間に亘る本番プログラムを経験して得られた感想や気づきを全員で共有した上で、今後の人生をどのように歩んでいくか、長野とどう関わっていくかについて各人が時間をかけて考え、自分の考えを作文で表現した。

2つ目は、信州エクスターンシップの趣旨に賛意を示し、学内での広報や意欲ある学生の募集活動を行った大学の数が増えたことである。その結果、信州エクスターンシップ2016では首都圏の6大学から学生が参加したのに対し、信州エクスターンシップ2017では10大学からの参加があった。10大学のうち2大学は長野県内の大学で、より異質な環境下での参加学生同士のコミュニケーション促進と、特に長野県内の大学の学生に、地元・長野にもそれぞれ強みを持つ企業・団体があることを知ってもらうことを目的としている。

また、信州エクスターンシップ2017では、参加企業・団体も前年の11から18と大幅に増加した。

長野の企業・団体が信州エクスターンシップで学生を受け入れるには、長野県から信州エクスターンシップ2017事業実施の委託を受けたNPO法人 夢のデザイン塾が主催する長野県若年層人材戦略研究会の正会員になることが必須である。研究会は2016年から1年に

4回前後のペースで活動を行っており、前年正会員ながら受け入れを見送ったものの研究会での他の企業・団体の報告を目にして信州エクスターンシップ2017での学生受け入れを決めた企業もあった。

3. プログラムの振り返り

本章では、参加学生が信州エクスターンシップ2017で実際に経験した1週間のプログラムについて、スケジュール表(表3)を見つづ振り返っていく。

信州エクスターンシップ2017の核となるのは、日中の活動の大半を占めた企業・団体訪問とそこで働く職員へのインタビューである。学生はそれぞれ、あらかじめ決められた企業・団体を3名ないし4名のグループ単位で2ラウンドに亘って訪問し、それぞれの企業・団体に働く職員に対するインタビューに臨んだ。インタビューは、学生が「自分はどこでどう働きたいのか」ということについて考えるのみならず、インタビューされる側となった職員にとっても自分が長野で働いている理由について改めて考える契機となることを目的としている。1ラウンドは、2日間で1つの企業・団体を訪問するように設定されており、学生たちは2ラウンド、つまり2つの企業・団体を4日間かけて訪問した。

参加学生は毎晩のグループワークで、インタビューで得られた感想や気付きをもとにディスカッションを行い、全グループ共通の「自分たちは長野で何を得たか」というテーマの下、最終日である9月2日の成果発表会に向けて発表内容を練り上げていった(写真1)。特に9月1日は全グループが深夜まで作業に取り組み、中にはメンバー同士の葛藤を経験

(表3) 1週間のスケジュール表

日 程		
8月27日	午前	東京から長野へバス移動
	午後	オリエンテーション 共通講義
	夜	グループワーク
8月28日	午前	企業・団体訪問とインタビュー (第1ラウンド・1日目)
	午後	
	夜	グループワーク
8月29日	午前	企業・団体訪問とインタビュー (第1ラウンド・2日目)
	午後	
	夜	グループワーク
8月30日	午前	りんご収穫体験 そば打ち体験・昼食 共通講義
	午後	
	夜	グループワーク
8月31日	午前	企業・団体訪問とインタビュー (第2ラウンド・1日目)
	午後	
	夜	グループワーク
9月1日	午前	企業・団体訪問とインタビュー (第2ラウンド・2日目)
	午後	
	夜～	グループワーク
9月2日	午前	成果発表会
	午後	修了式 フェアウェル・パーティー

したグループもあった。講師の方々も夜通しで発表準備に付き添った。

信州エクスターンシップ2017では、参加学生が研修所で共通で受ける講義も質量ともに

塾賞」、「JA長野県グループ賞」、「長野県若年層人材戦略研究会賞」として表彰し、各受賞グループの学生全員に賞品が贈られた。また、参加学生全員には阿部守一長野県知事名での「信州エクスターンシップ2017修了証」が授与された。

修了式終了後は、信州エクスターンシップ2017の最終プログラムとして、フェアウェル・パーティーがJA長野県総合研修所の食堂で開催された。信州サーモンのサラダやおやき、そばなどといった長野の名物に舌鼓を打ちつつ、参加学生は7日間の思い出を語り合ったり、訪問しなかった企業の担当者と名刺交換をして充実した時間を過ごしていた。

4. 信州エクスターンシップ2017の効果と地域滞在型インターンシップの展望を探る

信州エクスターンシップ2017の重要な目的の1つは、都会で暮らす就職活動前の若者に短期間ではあるが長野での暮らしを体験してもらい、長野で働く人々の話を聞くことで、「自分はどこでどう働きたいのか」について考える契機を与えることである。

吉澤氏は、主に大都会の企業・団体で実施されるインターンシップと対比しての地域経済社会でのインターンシップの利点について、「大都市集中が定着して以降の若年層には、異文化との遭遇、異世代とのコミュニケーション経験であり、それは多様性の体験となる」こと、「農業セクターの職業や地域型の職業は、細分化され規格化された企業セクターの就業経験よりも、『職業の多彩さ、多様さ』を知るうえではるかに有意義なものとなる」ことと述べている（吉澤・阪井・川井、

2015）。その上で、「現在の大都市生まれ、大都市育ちの若年層にとっては、海外留学に匹敵するインターンシップ効果を得られるものと思える」と結論付けており、これらの発想がこれまで2回に亘る信州エクスターンシップ事業と2017年夏に実施された魚津エクスターンシップ事業の土台になっている（2017年夏に実施された魚津エクスターンシップの概要については川尻（2017）を参照）。

さて、参加学生は長野での1週間の経験を通して吉澤ら（2015）の指摘する地域経済社会の多様さにどの程度気付いたのであろうか。筆者は阪井氏と共同で、参加前と参加後の「認知の変化」について参加学生に対して調査を実施した。その内、ここでは農業セクターについて言及のあった回答を3つ全て紹介する。

ある参加学生（2年生・女性）は、「長野に対してさびれたイメージを持っていたが、そうではないと気付いた」という。この回答について彼女への追加インタビューを行いさらに掘り下げて尋ねてみると、「人や車の往来が思ったよりあった。大きなビジネスビルはあまりないが、小さな建物だったとしてもそれぞれの会社で人々が頭を捻り、自社の強みを活かして、社会に貢献し利益を上げようと頑張っていることに気付いた。また農業が身近にあり、農業を中心として食生活・日常生活も豊かなように感じる」との回答が返ってきた。

この参加学生は、ある製造業の本社へ向かう途中に見た長野市内の街並みやその企業でのインタビューで聞いた内容、そしてJA長野中央会を訪問した他の学生からの感想を聞いてこのように回答した。彼女の回答の中で

は農業のイメージの変化にも言及されていたが、他の参加学生もこのような変化を示唆した回答を残している。

別の参加学生（1年生・男性）は、「農業に関わる人の高齢化は問題と思っていたが、高齢者のノウハウを活かすことができるなど、高齢化も農業の発展につながると意識が変わった」と述べている。この参加学生はJA長野中央会でインタビュー活動に取り組んだが、そこで得られた農業従事者の高齢化に対する職員の知見や、職場見学の時間に実際に見た「農業従事者の高齢化」の現場が、彼のイメージを変えたようだ。

農学部に通う参加学生（2年生・女性）もJA長野中央会を訪問し、「JAの事業の多彩さと生活への密着度に驚いた」と述べている。以上、36名中の3名ではあるが、身近な農業が作り出す生活の豊かさ・農業従事者の高齢化がもたらすポジティブな側面・JAの生活への密着度に1週間という短い期間で気付いている。

このことは、筆者に新たな好奇心を抱かせる。より濃密で、期間が長く、農業セクターに特化した地域滞在型インターンシップが行われたら、これに参加した若者はどのような価値観の変化を起こし、どのような行動を起こすだろうか。「実際にUIターンをして農業を始めてみたい」と思わせるには越えるべきハードルがやや高いと思われるが、吉澤ら（2016）の指摘するように他職業セクターに対して新産業・新技術の開発ポテンシャルで優位性を持つ農業セクターにおいて、新しいムーブメントが他所からやって来た若者を中心に起こるかもしれない。

【参考文献】

- ・川尻知弥（2016） 「信州エクスターンシップ」開催報告～長野から始まる、人材還流戦略の改革～ 共済総研レポート, No.147, pp. 10-15.
- ・吉澤潔・阪井和男・川井真（2016） 地域経済社会ベースのインターンシップが農業セクターの若年層人材戦略を促す 共済総合研究, Vol. 72, pp. 76-91.
- ・吉澤潔・阪井和男・川井真（2015） 農業セクターへの若年層人材還流について—戦略としてのインターンシップ— 共済総合研究, Vol. 71, pp. 10-31.
- ・川尻知弥（2017） 「魚津エクスターンシップ」開催報告～住みよいまち・魚津の、新たな人材還流戦略～ 共済総研レポート, No.154, pp. 28-31.